

ENGLISH CAFÉ

| VOL. 6



特集：サスティナブルで

新しい価値を授業に活かす

- column -

コーヒー2050年問題

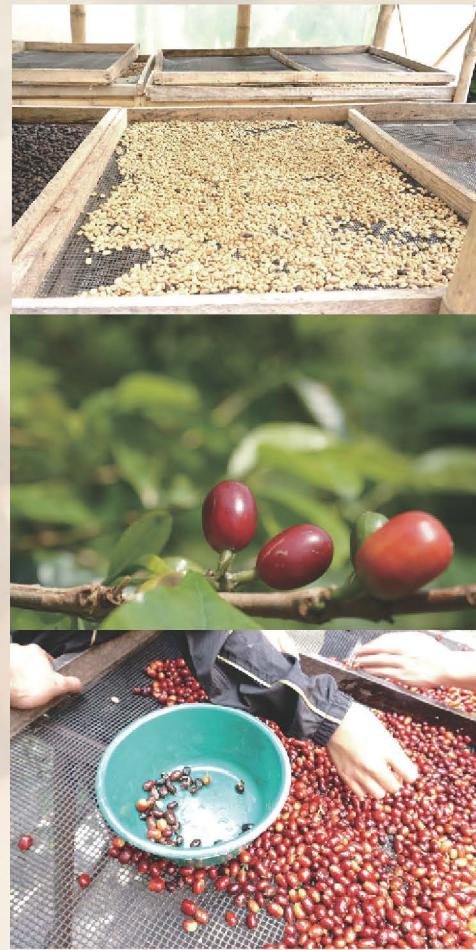
いただきもののコーヒーが美味しいと、その銘柄のコーヒーを求めてお店を回ってみました。意中のコーヒーを見つけ、お湯を注ぐだけのドリップタイプを即購入。朝の一杯は勤労へのモチベーションも上がり、何とも言えない贅沢な時間です。

コーヒーと名が付くものはインスタントでも何でも美味しいと聞いてしまいます。休日に自宅で丁寧に入れるもの、訪問先でいただくコーヒー、仕事場のセルフで入れるものなどなど。コーヒータイムはその豆の味だけではなく、だれかとの関わりの温かさをも、記憶として体にすり込まれる感じがします。「お茶でもいかがですか?」という言葉に、初めて会う人なのにコーヒーで心が解放され会話が弾むこともあります。

そのコーヒーが地球温暖化の影響で危機を迎えていました。コーヒー豆の栽培に適した地域が限られてくるというのです。とりわけ、アラビカ種のコーヒー栽培に適した地域が半減するそうです。一つの原因是地球温暖化です。サスティナブルなコーヒー生産のために私たちにどんなことができるでしょうか。異国のコーヒー農園の人々がどんな苦労をしながらコーヒー栽培を続けているのか、その理解なくしては、たとえどんなに小さなアクションも本物ではないような気がします。

サスティナブルで新しい価値を

コーヒーに限らずに、今、当たり前にあるものが、地球温暖化や感染症などの問題で存続の危機に瀕しています。英語教育においてもグローバル化と情報化の激しい荒波の下、何が必要で何が正しいのか授業に対する価値観がゆらいでいるような不安を覚えます。不易と流行という言葉がありますが効果的な指導法は持続可能な手法として次世代に確実につないでいかなければいけません。同時に、時代の波に乗りながら普遍的なよさを上手に「ブレンド」して新しい価値に進化させていく努力が求められます。



会話を楽しむ児童の育成

～相手意識を持った言語活動の実践～

岩沼市立岩沼西小学校

(前仙台市立長町南小学校)

教諭 中島 和敬



○サステイナブルな授業⇒相手意識を持つこと・自分の考えや気持ちを伝えること

児童に相手意識を持たせること、ささやかでいいので自分の考えや気持ちを伝えること、この2つが言語活動の質を大きく左右すると考えています。私自身は英語専科3年目ですが、1年目の頃の会話の様子を見てみると、こんな会話をしている児童が多いことに気付きました。

S1: What food do you like?
S2: I like pizza. What food do you like?
S1: I like ramen. See you.
S2: See you.

「質問をして答えたら終わり」になる児童が多く、不自然さを覚えました。この会話を日本語訳して児童に伝えるとほぼ全員が「冷たい。」「(相手に)興味なさそう。」という感想を持ちます。ここで初めて、児童はもっと自然な会話の必要性を感じます。こうした「会話をもっと楽しくしたい」というモチベーションを持たせた上で様々な活動に取り組ませるようにしています。具体的な手立てとして、3・4年生ではリアクションや“Do you like~?”“What~ do you like?”を取り入れた会話の指導、5・6年生では具体物を使って発表するショーアンドテル的な活動、既習事項を取り入れたSmall Talkの指導を積極的に行ってています。

実践報告1 <3年生 Unit5 What do you like?(全4時間)>

単元目標

1学期と一緒に頑張ってきたクラスの友達に贈るThank you カードを描くために、相手のことを深く知ることができるよう工夫して、何が好きかを尋ねたり、答えたりする。

第1～3時	“What ○○ do you like?”の表現を知り、好きな色・食べもの・スポーツを尋ねて友達のThank youに色を塗ったり、食べものやスポーツの絵を描いたりする。
第4時	友だちの一番好きなものを描くために、好きなジャンルを知り、くわしく聞く。

◇指導について

本単元では“What ○○ do you like?”を使って、友達とやりとりをすることが目標となっています。そこで、既習表現の“Do you like ○○?”や“Me, too.”、“I see.”といったリアクション表現を用いながら会話することで、相手意識を持ちながら尋ね合うことができると言いました。相手意識をしっかりと持つには会話の必然性も必須だと考え、「友達に贈るThank youカードを贈るために」という目的を与えたことで、児童は友達の好きなものを進んで聞きに行ったり、友達の好きなものを知った時、よりよいリアクションをしたりすることができていました。3年生に、どのような流れで既習表現を使うかを考えるのは難しいので、何度もALTとのモデル会話を聞かせることで、児童は話の流れや使っている表現に気付くことができました。

<第4時のモデル会話> (S⇒児童)

前単元Unit4での既習表現

S1: Hello.
S2: Hello.
S1: Do you like animals?
S2: So-so.
S1: OK. Do you like anime?
S2: Yes, I do!
S1: Oh! Me, too! What anime do you like?
S2: I like Pokemon!
S1: Me, too!



実践報告2 <6年生 Check Your Step 1 外国の人へメッセージを伝えよう(全3時間)>

単元目標

ALTの先生に地域の魅力を知ってもらえるように、自分の気持ちを伝えたり、ALTの先生の気持ちを聞いたりしながら、おすすめの場所を紹介する。

◇指導について

本単元はUnit1～4の言語材料を駆使した児童の姿を見取るためのパフォーマンステストに位置づけました。特に、Unit3で学んだ“You can～.”とUnit4で学んだ過去を表す言い方を使って、おすすめする場所の良さや自分との関わりを伝えることができること、“What～do you like?”や“Do you like～?”を使って、相手意識を持ちながらスピーチすることができることを重点的に指導しました。振り返りには「前に習った英語を自由に使うことができて、英語がうまくなかった気がした。」、「ALTの先生が興味を持ってくれるようにたくさん質問を考えた」等、話すことに対する意欲や思考力が深まった児童が多く見られました。

○モデルスピーチ (S⇒児童 A⇒ALT)

S1 : Hello, Mr.○○. This is the MALL.
A : What's the MALL?
S2 : It's a department store. You can enjoy shopping.
I enjoyed shopping with my family.
S3 : You can go to the theater. Do you like movies?
A : Yes, I do.
S3 : What movie do you like?
A : I like Harry Potter.
S4 : That's nice! You can eat cheesecakes.
It's delicious. Do you like cheesecakes?
A : Yes, I do.
S4 : Me, too.
S : Let's go to the MALL! Thank you for listening.

既習表現の活用



○終わりに

限られた言語材料の中で望ましいコミュニケーション能力を育っていくには、授業者がいかに既習事項を駆使して「本物のコミュニケーション」に近付けられるかが鍵になると思います。「どんな言語材料を学んできたのか。」、「知的負担の少ない表現はどれか。」等、児童の実態に合わせて、ゴールの言語活動を考えていく必要があります。その際、児童が相手意識を持ってやりとりできるか、必然性のある目的・場面・状況になっているか等も合わせて考えなければいけません。

多くの「話す楽しさ」を知っている児童を中学校に送り出していけるように、これからもより良い言語活動の研究と実践に努めていきたいと思います。

伝え合うことのよさを実感できる 外国語の授業実践

～単元構成・シェアリングタイム・振り返りの工夫を通して～

盛岡市立津志田小学校
(前 盛岡市立厨川小学校)

教諭 伊東 茂



○厨川小学校での実践

本校児童は明るく落ち着いた雰囲気で生活し、どの教科においても意欲的に学習に取り組んでいます。特に外国語活動・外国語を好きな児童が多く、語彙や表現に慣れ親しむ場面では楽しんで活動しています。しかし、自分の考えや気持ちを伝え合おうとする主体性は学年が上がるにつれて低くなる傾向があります。そこで、本校では「伝え合うことのよさを実感できる言語活動」を今年度の重点として研究に取り組んでいます。

1. 単元構成の工夫

(1) 題材との出会い

単元導入におけるsmall talkで、担任が自分にとって身近なあこがれの人として校長を紹介しました。児童は校長の意外な一面を知り、驚くとともに興味関心を示していました。その後本単元の最終活動で「自分にとって身近なヒーロー」を紹介することを伝えると、「おもしろそう」「だれを紹介しようかな」などのつぶやきがあり、児童は目を輝かせていました。

(2) 単元計画

① 単元名 My hero 「あこがれの人をじょうかいしよう」

② 単元の目標

自分のあこがれの人をよく知ってもらうために、その人のできることや得意なことなどについて、具体的な情報を聞き取ったり、自分の考えや気持ちなどを含めて話したりすることができる。

③ 指導計画 ※先生→有名人→友達の順に紹介し、発展するように単元を構成した。

第1時	Small talkを聞き、単元の目標を知るとともに見通しをもつ。	第4時	身近なヒーローを紹介するメモを書くなど発表の準備をする。
第2時	先生についての発表を通して、ヒーローを紹介する表現を知る。	第5時	身近なヒーローについて自分の考えや気持ちを含めて発表する。
第3時	あこがれの有名人についてできることや得意なことを発表する。	第6時	大文字や小文字のルールを理解する。

2. 児童の声を言語活動に活かすシェアリングタイム

(1) つまずきの共有

単元全体を通して、dialogの確認や前半の発表が終わったところで、シェアリングタイムを取り入れ、困ったことや難しかったことの共有を図りました。

T 「言いたいけれど言えなかつた表現はありますか。」

S1 「『彼はバスケットボールが得意』の言い方を忘れました。」

T 「何て言うんだっけ。」

S2 「"He is good at basketball."です。」

T 「みんなで確認できてよかったです。」 Thank you, S1 and S2.」



個人のつまずきをみんなで確認することで伝え合うことへの自信につながりました。つまずきを話したS1と教えてくれたS2に感謝を伝え、自己有用感をもたらせるようにしました。

(2) よかったことや感想の共有

シェアリングタイムでは、自分がうまくいったことや友達のよかったことについても共有するようになりました。

T 「自分がうまくいったことや友達のよかったことがあったら発表してください。」

S3 「"She is good at basketball."から "She is good at an unicycle."に替えた驚いてもらいました。」

T 「新しい情報が驚きにつながったのですね。」

S4 「一番伝えたかったことを最後に言ったら "That's nice."と言ってもらいました。」

T 「伝える順番を工夫することで印象が変わるのでですね。」

S5 「S6さんの発表を聞いて、S7さんが料理が得意なことを知り、驚きました。他の友達についてももっと知りたくなりました。」

T 「よく知っている友達でも、知らなかった一面がまだありますよね。」

後半の発表では、友達のうまくいったことを自分の発表に取り入れながら、友達の意外な一面をよりよく伝えようと意欲的に発表する姿が見られました。

3. 学習へ向かう気持ちを高める振り返り

振り返りでは「がんばったこと」「成長したこと」「友達のよかったこと」を視点にして感想に書いて発表するようになりました。

<児童の感想(第5時)から>

「順番や強調表現を工夫して伝えることができました。」「"is good at"を使って得意なことが言えるようになったので、次の時間も使いたいです。」「Aさんが相手意識をもって伝えていました」「Cさんがボッチャができる事を知って驚きました。」

自分ががんばったことや成長したことに対する達成感や学習内容の有用感を感じるようになりました。また友達のよかった点や意外な一面を紹介し合うことで、伝え合うことのよさを実感する児童が増えました。

4. 実践の成果と課題

児童の実態に合った単元を構想したことにより、児童の目的意識が高まり、学習への主体性の向上につながりました。児童の声を大切にしてつまずきの解決やよさの共有を図ることにより、言語活動のステップアップにつながりました。また「がんばったこと」「成長したこと」「友達のよかったこと」を視点にして振り返りをさせたことにより、児童は達成感や伝え合うことのよさを感じるようになりました。

今後も児童の主体性が高まるような魅力ある単元の構想、言語活動の工夫改善を行うことが必要と考えます。またICTを活用した自己評価や学びを調整する力の育成にも取り組むことが大切と考えています。



教科等横断的でサステイナブルな授業

～自分の考え方や気持ちなどを主体的に伝え合う授業づくり～

由利本荘市立西目中学校

教諭 小番 弥生子



本校は、SDGsの視点を核に様々な教育活動に取り組んでいます。3年生の英語の授業では、各単元で、SDGsの目標と関連させて、単元の終末に全体を通して学んだことや感想、自分の意見等を英語で発信する学習を継続して実践しています。このような活動はどの単元においても可能で、サステイナブルな活動であると言えます。次に紹介する実践も外国語、総合的な学習の時間、道徳を教科等横断的に関連させて行った授業実践です。

1. 単元について

(秋田県外国語教育研究大会 令和4年11月18日の授業実践より)

単元名 「A Legacy for Peace」
(SDGsとの関連…SDGs4・10・16)

単元のねらい

平和や人権の大切さについて、相手の意見を聞いて自分の意見を深めたり、自分の意見を伝えたりするために、読んだり聞いたりしたことや自分の考えを整理し、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができる。



2. 題材研究と生徒が伝えたいという思いが高まる単元構成

本単元の内容は、インドの民族独立運動の最高指導者であるガンディーの伝記であり、「平和や人権」がテーマとなっている。社会的な話題は専門的な語句の使用が多く、生徒にとっては難しく感じられるが、映画や音楽を用いてガンディーの生き方や彼の影響を受けた著名人について学習し、関心を高めた。

単元の終末である本時では「平和や人権の大切さについて、自分の考えを深めるために、この単元で学んだことや、自分の考え方や気持ち、理由などを伝えよう」という学習課題で、本単元のまとめの活動を行った。生徒はガンディーへの思いや、世界平和のためにできることなどを英語で発表した。

本校3年生は総合的な学習の時間において、「未来への創造～SDGs達成に向けて～」を学年のテーマに、活動を展開した。また、道徳の授業では、国際紛争や児童労働、ジェンダーの平等、いじめや差別など、現代の人権問題や不平等な世界の現状について学んだ。生徒たちは日頃からSDGsの視点で、世界の問題に目を向ける一方で、身近な生活の課題に対しても自分たちには何ができるかを考え、実践している。他教科で学んだ知識や経験したことなどがつながると、生徒の伝えたいという思いが高まる。

単元のテーマとSDGsの関連について確認する。

ガンディーに関する伝記を読み、文章の概要を捉える。

映画「Gandhi」の一部や洋楽「Happy Christmas」を鑑賞し、時代の背景や人権問題について理解を深める。

教科書の英文の内容を音読したり、リテリングの練習をしたりする。

リテリングを行い、相互に評価し合う。

単元を通して学んだことや感想などを英語で伝える。(本時)

単元指導のおおまかな流れ

3. 生徒の発信力を高めるために行っている取組

○ペアとの1分間の対話活動(1 minute chat time 写真①)

帯活動として、ペアとの1分間の対話活動を行い、マッピングメモを元に即興で伝えたり、ワードカウンターを用いて発話語数を数えたりすることで、話す力や話すことへの関心を高める工夫を継続して行っている。



<写真①>

○リテリング(写真②)

教科書の内容について、自分の感想を付け加えたり自分なりの表現に言い換えたりして、相手に伝えるリテリング活動を行った。自分の表現と友達の表現を比較し、その違いについて楽しんで活動を行っていた。



<写真②>

○生徒が自分の意見を発したくなる発問(写真③)

題材が伝えたいテーマは何かを考え、テーマに迫る発問を決める。正解が1つではなく、多様な意見を共有できるような発問を行う。以下はこの単元の中で問い合わせてきた発問の例である。

- What do you think of Gandhi?
- If you were Gandhi, what would you do?
- What does this story tell us?
- What did you learn from Gandhi or Unit5? (本時の発問①)
- What can we do for our lives? (本時の発問②)



<写真③>

○スピーキングからライティングへ

即興で自分の意見や考えを話した後に、文章で書くことで、自分の誤りに気付き、次へのステップアップへつなげる。

生徒が書いた英文より

- I think Gandhi is a great person. He faced a lot of discrimination. But he stood up alone. I respect him. I learned why we mustn't use violence.

4. 終わりに

生徒の振り返りより

- 平和を守っていくことがどんなに大切な事なのかを、ガンディーのストーリーを通して考えた。
- 人種の壁を越えて、世界中の人たちと一緒に生きていきたい。
- 違いや個性を認め、受け入れていきたい。
- 差別をなくすために、自分にできることを探し、実行に移していきたい。
- これからも募金やフードドライブなどの活動に参加して、自分ができることからしていく。

振り返りには、これから自分の生き方や世界平和を願う、前向きな内容が多かった。生徒が本気になって考え、自分の考え方や意見を仲間と共有し、「世界の平和のために貢献できる人」、「自分や周囲の人を大切にできる人」を英語の授業を通して育てていきたい。



- column -

ICTで大きく変わる授業スタイル

国のGIGAスクール構想がコロナ禍で爆発的に進み、英語の授業のスタイルも大きく変わろうとしています。今まででもデジタル教材を使ったチャンツ、リスニング、アクティビティなど音声重視の授業は展開されていましたが、一人一台の端末が与えられた今、家庭学習も含めマルチタスクの活動が可能となりました。教科書に書き込んだ自己紹介文の画像を送ると、教師が添削して、端末に送ってくれます。パフォーマンステストに向けた練習では、自分の話す英語を録音し、データを教師に提出すると、丁寧なアドバイスが返送されます。



その一方で、外国語の学習に必要な言語活動やその前段階の表現に慣れ親しむ活動はどのように扱われているのか気になるところです。指導者が日本語で始終情報機器の操作を指示している姿も目にします。たまたま、単元の中でスライド作りが必要な一時間だったかもしれません。しかし、英語の時間はできるだけ英語を使う時間であってほしいと思います。舌や唇を正しく使いながら英語らしい発音を実感させたいと思う教師もたくさんいると思います。小1の国語の授業ですら、あいうえおの口のかたちを確認し、教科書を大きな声で読む練習をします。アナウンサーが明瞭で美しい日本語を話す隣には日々のトレーニングがあります。言葉の習得に不可欠な音声を鍛えるきっかけを、ICTを効果的に活用しながら英語の授業の中で、まだまだ工夫できると感じています。

あれも、これも話したい！もっと上達したい！

3年生の外国語活動の授業を見る機会がありました。教室から子供たちはつらつとした英語の音声が聞こえます。みんなで練習したあとにペアになって好きなスポーツ、色を尋ね合っています。次の段階ではその情報を基に友達に渡す手書きのカードを作っていました。なぜか、ほっとする光景です。限られた時間の中でALTを始め教師の英語をたくさん聞いたり、ささやかな表現であっても自分のことについて話したりする活動がしっかりと確保されているのです。



デジタル化・グローバル化の時代、一人一台の端末の整備は様々な可能性をもたらしてくれました。しかし、人と人をつなぐコミュニケーションを上手に学ぶために、対面でのやり取りは不可欠です。もっと話したい、これもあれも伝えたい、など、自身のパフォーマンスの上達も願いながら、人と関わる心地よさを感じられるとうれしいです。デジタルとアナログの適度なバランスを意識し、良いところ取りの巧みな「ブレンド」が最終的にサステイナブルな授業へと進化するかもしれません。



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8908 東京都文京区向丘1-13-1 駅03(5684)8111
東北支社 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡4-3-10 仙台TBビル4階 駅022(742)1213